

11
November

俳句

(2024)



目次

たべもの俳句	モーロク俳句	歳時記俳句
10 〽	5 〽	1 〽

11月の和名は「霜月」。
文字通り「霜が降りる月」という意味です。

上旬のころはピンときませんが、日を追うごとに朝晩の気温が下がって、下旬になるころにはまさに霜が降りるような寒さを感じるようになってきます。

このように、ひと月のうちでもっとも変化が大きいのが11月。青空高く秋晴れの好天が続く月初めから、街路樹の木々の紅葉が深く鮮やかになる中旬を経て、落ち葉が舞う冬の始まりへ。木枯らし一号のニュースが聞こえてきたり、早いところでは初雪の便りがあるのもこの月です。

十一月朝の散歩に汗にじむ
十一月庭の鉢植え眠りけり
神無月金目の干物奮発し

柿落葉すべて落ちれば空がある
唐突に妄想爆発竜の玉

若者は沢庵離れ少子化に
立冬や何を希望の姫蔓蕎麦

孫達のおもちや終活冬に入る
沙美の浜波おだやかに冬に入る
水槽の金魚に無縁冬に入る

手入れせずいつものところ石菫の花
石菫の花恋する歳になりにつけり

山茶花の花を眺めて深呼吸



茶の花の白まぶしけり日差しあり

小春日や鉢植え手入れ忙しく
雑草の中に際立つ野菊かな

哲学や寂しき日々の枇杷の花

レンタルの衣装を選び七五三
七五三ウーバーイーツで祝いけり

小夜時雨イルミネーション六本木
夕時雨宅急便のチャイム鳴る

冬日向ローリエ干してにさんにち
あざとくも小ささく咲いて冬ざくら

木の葉散る吾散るときもそこにあり
てっぺんを切られ坊主に櫨枯る



期高齢勤勞感謝無駄日なり
枯れて立つ狗尾草に吾をみる

枯葉色蠶螂枯れて我枯れて
枯蓮に風邪は強気で吹きつける

人間は宇宙の塵よ冬霞む
寂しげにただ寂しげに帰り花

ドラえもんマンガ就活冬夕焼
鳥たちは毒を知ってかピラカンサ





モーロク俳句

モーロクし十一月も神頼み
茶が咲いて吾はモーロク無伴奏

モーロクしされど分限冬林檎
モーロクしされど湯豆腐鱈加え

時雨るるやモーロクすれどオムライス
モーロクし冬きたりなば目刺しの目

立冬や入れ歯ギシギシモーロクす
立冬や明日の空はモーロクす

モーロクし魂遊離冬に入る
モーロクしごろんごつんと冬に入る
モーロクし無期懲役に冬に入る



モーロクしされど山茶花白が好き
山茶花の白を好みてモーロクす

モーロクすされど目覚めり石露の黄に
モーロクし恙無きかな石露の花

モーロクし朝の定番雑炊で

モーロクし欠伸伝染小春日や
モーロクし静かに静かに小春日も

モーロクし水鳥となりそれもよし
モーロクし今更なれど酉の市

持て余すモーロクすれば花八手

モーロクし懺悔もむなし枯蟪蛄
モーロクし終章にいる枯蟪蛄



モーロクし半死半生枯蠮螋

モーロクしてくたくたくと冬青空
モーロクし幽霊となる冬桜

モーロクし電動バイク小春かな
モーロクし記憶なくして返り花
モーロクしこれより先は返り花
モーロクしされど佳き日を返り花

うやむやにモーロク進む黄落期
モーロクし己れ見ること竜の玉

モーロクし冬の蜂にも逃げ惑う

モーロクし置きざり恐れ芒原
モーロクし作られし夢芒原



振り向かぬモーロクすれば大枯野
モーロクし枯野仕様の顔になり

モーロクし罨かもしれぬ草紅葉
モーロクし心ささくれ初氷

モーロクし枯れ枯れ枯れて枯芙蓉
モーロクし何が楽しく枯芙蓉

薄氷や物音立てずモーロクす
落ち葉してモーロクすればまた落ち葉





たべもの俳句

マナガツオグリルで五分塩焼きに
マナガツオ黄金タレで照り焼きに

おしゃれするししやも塩焼き洋風に
味噌だれでししやものフライ骨までも

豚こまと白菜だけの豚汁を
時雨来ることことこととモツを煮る

朝粥の塩あんばいや冬に入る
甘酢漬けセロリ塩もみ味なじみ

シヤキシヤキの食感くせにセロリ和え
霜の朝鍋の残りのおじやかな



スンドウブチゲ相思相愛絹豆腐
夜食にもねぎと鶏手羽中華がゆ

深谷ねぎ肉巻きフライ豚バラで
深谷ねぎ味噌おむすびで昼ご飯

サンラータン酸味と香り冬浅し
小春日のレトルトカレーうどんかな
小春日に漬物つまみ昼酒を

たっぷりの葱と豚バラ重ね蒸し
小松菜とがんも含め煮夕ご飯

白菜とベーコン和風パスタかな
焼諸や失業保険次女受給

熱爛や難しきこと忘れさり



ほっとする白菜煮物やさしさも

白菜と豚肉うま煮ピリ辛に

白菜と春雨スープつるりんと

白菜と春雨スープ中華風

淡泊なたらとごぼうをトマト味

香ばしく大根を焼く江戸料理

具だくさん土鍋ラーメン冬めいて

石蓼咲いて今日のお昼はたこ焼きで

焼鳥は皮が一番昭和かな

しわしわに痩せて値打ちが吊し柿

ふつつつとシチュー煮上がる冬めく夜





